

本山「世界経済論」の系譜と方法論

2006.1.16

大学院・本山美彦ゼミ

報告者・鈴木 啓史

京都大学「世界経済論」の系譜

詳しい説明はこちらをご覧ください。

西暦	元号	部局1	部局2	講座	担当者	経済学部長経験	主著
		京都帝国大学法科大学	法科大学	商業経済学			
1898	明治31	京都帝国大学法科大学	法科大学	農業経済学	新渡戸稲造		農業本論
1909	明治42	京都帝国大学法科大学	法科大学	農業経済学	河田嗣郎	○	土地経済学
1933	昭和8	京都帝国大学経済学部	経済学部	国際経済論	作田荘一	○	世界経済学
1924	大正11	京都帝国大学経済学部	経済学部	外国貿易論	戸田海市		商業経済論
1928	大正15	京都帝国大学経済学部	経済学部	植民(殖民)政策	山本美越乃	○	植民政策研究
1930	昭和5	京都帝国大学経済学部	経済学部	同上・農業経済学	八木芳之助	○	米価及び米価統制問題
1936	昭和11	京都帝国大学経済学部	経済学部	国際経済論	松岡孝児		金為替本位制の研究
1939	昭和14	京都帝国大学経済学部	経済学部	東亜経済政策原論	谷口吉彦	○	購買力補給案-ネオ・インフレーション
1940	昭和15	京都帝国大学経済学部	経済学部	東亜資源論	蜷川虎三	○	統計学研究 第一
1941	昭和16	京都帝国大学経済学部	経済学部	統制経済論	柴田敬		日本経済革新案大綱
1948	昭和23	京都大学	経済学部	世界経済論	松井清	○	世界経済論体系
1957	昭和32	京都大学	経済学部	世界経済論	小野一一郎	○	ブラジル移民実態調査
1977	昭和52	京都大学	経済学部	世界経済論	本山美彦	○	貨幣と世界システム

注：小野一一郎は助教授就任年である。

確認：柴田敬の退官年（1946）は公職追放がらみで依願退職している

が、同時に退職した小島・谷口・汐見も公職追放がらみの退職か？

京大経済学部のユニークさ-本山「世界経済論」への影響-

・マルクス経済学の河上肇は最初、J Sミルの研究から後にマルキストとなる。

孫弟子の杉原四郎が「マルクス、ミル、河上肇」研究を行うことになる。

・近代経済学の高田保馬は、日本マルキストが黙殺していたヒルファーディングとバーム

・バベルク論争を最初に日本に紹介した。

近代経済学者の森嶋通夫はマルクスの労働価値説を矛盾のないモデルとして構築

柴田敬はマルクス再生産表式と近代経済学を結びつける。



京都大学経済学部は伝統として近代経済学とマルクス経済学は互いに刺激しあい高めあっていた。これは他大学と比較して特徴的なものではないのか？

以下、この点に注目しながら本山「世界経済論」の方法論を明らかにしていこう。

本山「世界経済論」の方法論

本山美彦（1983年）『貿易論序説』有斐閣、

（1986年）『貨幣と世界システム - 周辺部の貨幣史 - 』三嶺書房、

（1993年）『ノミスマ（貨幣） - 社会制御の思想 - 』三嶺書房

本山美彦編（1995年）『開発論のフロンティア』同文館

以上の「序文」と

矢野修一（2004年）『可能性の政治経済学 - ハーシュマン研究序説 - 』

（法政大学出版局）

から読み解いてみたい。（色文字はすべて報告者によるもの）

本山美彦（1983年）『貿易論序説』有斐閣。

「あらゆる解放は、人間の世界を、諸関係を、人間そのものへ復帰させることである」（『ユダヤ人問題』、『マルクス・エンゲルス全集』第1巻、407ページ）

私の短い研究史を顧みても、現代のマルクス主義的著作の多くは、学問への情熱よりもむしろ懐疑を私に植えつけてきたように思える。そのために私は、隣の青い芝生の中に入りきることをどれほど夢想してきたことか。この決意がつかなかったのは、ただひとえにマルクスのこの言葉の存在のゆえであった。

研究上の直覚から言えば、マルクスの経済学よりも非マルクスの経済学の方がはるかに具体的領域を拓ける可能性をもっている。

しかし、そこに飛び込めなかったのは、非マルクスの経済学の非人文的要素になじめなかったからである。あるいは、いとも簡単にマルクスを軽蔑してしまうその姿勢に単純に反発したためなのかもしれない。そのたびに、私はマルクスのこの言葉をつぶやいていた。それにもかかわらず、多くのマルクス主義者の著作は私に心の平安をもたらすものではなかった。そしてこのような心の屈折はいまでは、科学性という用語にすら生理的嫌悪感を覚えさせるほど増幅してしまっている。とくとくとしたり顔で語られる科学の名において人格が否定されてきたあまりにも悲しいできごとをこれまで幾度も見聞き、自らも経験したからでもある。確かに、人間の非人間的支配の根拠は、すべて客観的なもののうちに横たわる法則の無知からきている。したがって、「人間が人間の意識の主人公」になるための客観的・科学的認識に到達する営為の中に学問のすべての目標が注ぎ込まれたことは当然であろう。

しかし、錯覚はここから生じた。人間にとって最も重要で崇高な自由という理念が、人間的に成熟していないイデオログによって規定されてしまったのである。マルクスの名において、あるいは客観的科学的の名において、どれほど多くの自由がいまなお圧殺されているだろうか。自由の規定は多数ある。しかし、そのうちのただ一つの規定によって「すべてを集約せしめようような人間の前提をもってしては、人間の解放もしょせん抽象たるをまぬがれず、そのことがやがてまたそこからはみ出た人間性への不当な圧迫に転化するのである」（梅本克己「人間的自由の限界」、『著作集』第1巻、13ページ）という批判を私はいまなお素晴らしいと思っている。科学の名において語られる経済学においては、「すべてを説明しようという前提と、すでに説明しられている領域との区別」が「明瞭に自覚されるケースがあまりにも少なかったからである（同ページ）」

周知のように、1970年代は、これまでの価値観なり幻想がことごとく瓦解していく過程であった。それとともに経済学上のペシミズムが燎原の火のごとく若い人々の感性の中に入り込んでしまった。私はこのことを、人文性を失って、急速に自然科学性を主張するようになった経済学に対する痛ましい抗議として受け止めている。ところが、このペシミズムの中から湧き出てきたのは、人間的自由なるものへの深い洞察を欠いた体制搾取主義者たちの低俗な擲論であった。現在の私がなお経済学にしがみついているのは、この擲論に対する抵抗意識のせいなのかもしれない。

経済学はいまなにをすればよいのか。そして自分はいまなにをしているのか。

研究者というものになって以来すでに多くの歳月をおくりながら、私などはなまよいと焦りからの脱却をはたしえないでいる。それでも、冒頭のマルクスの言葉だけは私の心をしっかりととらえて離さない。そしていまでは、この言葉からしか私自身の生き延び方は出てこないし、経済学の再生もありえないという思い込みができるようになった。この心境に達したこと自体が現代の歴史的所産なのだと思い切ることによって、私は再び研究の情熱をかき立てようとしている。「おのがじしの時代において、歴史としての現代のただなかに有限の生をつねに生きている当人、ないしは歴史的個性を有する当該社会にとっては、自分の属しているそのかけがえのない時代」（いいだも『現代社会主義再考（上）』11ページ）を自ら語ればよい、という境地に私はやっと立つことができた。

本書は、研究につきまとう危機を克服すべく、マル経をつきはなして書いたものである。それは、なによりも私の心そのものに言いかけせる作業であった。それにもかかわらず、本書が私的効用から公的効用に転化できたかというときわめて心もとない。なるべく私的情緒を殺しながら叙述したが、1人でも2人でもよい、本書の問題を真剣に受け止めてくれる読者をもちたいと痛切に願っている。それでも、この作業の中で人間的自由、民主主義という言葉の重みをやっと実感をもって理解するようになったことだけは確かである。私自身はこの作業で経済学の1つのありかを見出そうとした。

人間を関係概念としてとらえたマルクス初期の名言

京大マルクス学徒としての発言

「科学主義」に陥っているマルクス主義批判

マルクス主義における一元論的な決定論批判

研究者というものになって以来すでに多くの歳月をおくりながら、私などはなまよいと焦りからの脱却をはたしえないでいる。それでも、冒頭のマルクスの言葉だけは私の心をしっかりととらえて離さない。そしていまでは、この言葉からしか私自身の生き延び方は出てこないし、経済学の再生もありえないという思い込みができるようになった。この心境に達したこと自体が現代の歴史的所産なのだと思い切ることによって、私は再び研究の情熱をかき立てようとしている。「おのがじしの時代において、歴史としての現代のただなかに有限の生をつねに生きている当人、ないしは歴史的個性を有する当該社会にとっては、自分の属しているそのかけがえのない時代」（いいだも『現代社会主義再考（上）』11ページ）を自ら語ればよい、という境地に私はやっと立つことができた。

本書は、研究につきまとう危機を克服すべく、マル経をつきはなして書いたものである。それは、なによりも私の心そのものに言いかけせる作業であった。それにもかかわらず、本書が私的効用から公的効用に転化できたかというときわめて心もとない。なるべく私的情緒を殺しながら叙述したが、1人でも2人でもよい、本書の問題を真剣に受け止めてくれる読者をもちたいと痛切に願っている。それでも、この作業の中で人間的自由、民主主義という言葉の重みをやっと実感をもって理解するようになったことだけは確かである。私自身はこの作業で経済学の1つのありかを見出そうとした。

（中略）

本書の題名を『貿易論序説』にしたのは、一刻も早く現代貿易の諸相に迫りたいという私の願望がこめられている。しかし、そこにたどりつくまでに、まだまだ整理しておかねばならぬ経済学上の難問が多すぎる。本書は低賃金労働力が世界経済に包摂されている態様を理解するための理論的視点を設定するところに狙いを限定してしまった。近い将来、現代貿易そのものを論じる、というのが私のもっとも大きな望みである。

本書における宣言

現代貿易を語る前に、整理しておかなければならない理論上の問題。

本山美彦（1986年）『貨幣と世界システム—周辺部の貨幣史—』三嶺書房

貨幣の神秘性を拒否して、「貨幣分析の主な困難は、貨幣が商品そのものから出てくるものであるということが分ればなくなる」（『経済学批判』）と誇らしく断じたマルクスですら、「信用貨幣のようにより高い段階の生産過程に属する貨幣諸形態が問題なのではない」（同）とか、「単純なる貨幣流通の考察から生じた流通貨幣の量に関する法則は、支払手段の流通によって本質的に変化する」（同）、との重大な留保条件を付していたことは見過ごされるべきではない。ケインズの時代には、銀行預金を主たる内容とする銀行貨幣が、現金（中央銀行券）の9倍以上の量を示していた。したがって、今日では、通貨供給量の指標は現金だけではない。これに要求払い預金、定期性預金を加えたM2にC（譲渡性預金）を併せた指標を通常の通貨供給量として使っている。しかし、この指標ですらもはや通貨供給量の代表指標としての資格も疑われるようになった。

その他の金融商品—たとえば、郵便貯金、信託、金融債、国債、公社債投信にれらを合算して凧という、現先（戻し条件つき債券売買）、中期国債ファンド等—がつぎつぎと開発され、商品でないものまでもが、貨幣化される時代に現代は入った。「貨幣の流通速度が一定であるとすれば、与えられた期間に流通する貨幣の総量は、実現せらるべき商品価格の総額プラス同一期間内に期限となる支払の総額マイナス相殺によって相互に差引かれる支払によって決定される」（『経済学批判』）、すなわち、「流通する貨幣の量は商品価格に依存する」（同）、とはとても言えぬようになってしまったのである。

中期国債ファンド等—がつぎつぎと開発され、商品でないものまでもが、貨幣化される時代に現代は入った。「貨幣の流通速度が一定であるとすれば、与えられた期間に流通する貨幣の総量は、実現せらるべき商品価格の総額プラス同一期間内に期限となる支払の総額マイナス相殺によって相互に差引かれる支払によって決定される」（『経済学批判』）、すなわち、「流通する貨幣の量は商品価格に依存する」（同）、とはとても言えぬようになってしまったのである。

（中略）

資本主義が自動調整作用を強化したから管理を放棄したのではない。それどころか、資本の荒々しい運動が資本主義社会そのものを壊しかねない危機を確実に大きくしている。にもかかわらず、その運動のあまりにもずさまじいエネルギーを前にして、国民国家はもはや手のほどこしようがないのである。資本主義の危機が現実的になくなったのではない。ただ表向きに市場復元力への信仰を告白することによってしか、政策立案者の恐怖はやわらがないのである。

（中略）

（資本主義の不均衡性の猛威）には1つの確実な方向がある、「金を別ろうとした錬金術師の背後に化学が成長したように、商品の魔術的な姿を追いかけまわした商品所有者の背後で、世界産業と世界商業の泉が噴出する」（『経済学批判』）、「全世界を意味する崇高なる理念は、1つの市場—世界市場のそれである」（同）。確実な方向とは、単一の世界経済の形成である。少なくとも、資本の国民国家へのひきこもりは今後長期にわたってありえないと思われる。

経済学はますます没歴史的になってきた。機械論的合理主義信仰全盛のもとで、歴史から学ぶべきものはほとんどないと豪語する経済学者が支配的になってしまった。貨幣論の分野でもそれは例外でない。機能論、メカニズム論、技術的理解、利子率と債券価格とを主軸とするオペレーショナルな理論のみが構築されている。しかし、私は、「歴史以外の方法により貨幣について長く批判に耐えうるような事柄をたくさん学ぶことができるかどうかはたいへん疑わしい」（『マネー』）というガルブレイスを支持する。貨幣に対して人の理解は長期にわたる周期的振幅を続けてきたからである。しかも、貨幣とは、ギリシャ語のノミスマの言葉が示しているように、社会的合意の産物である。しかし、もう一つは対等の力をもった社会構成員間の合意ではない。国民は権力者に貨幣認定を押しつけられるし、弱小国は強国に押しつけられる。もとより、この種の強制力がスムーズに実現されることはない。種々の抵抗力にあいながら、合意なるものがよたよたと形成されたのが歴史の真相であった。ただ、純粋経済の領域では、少なくとも貨幣は理解されえぬことだけは確かである。この面では、貨幣を一般的等価物として、商品形態の変態、結晶と見なすマルクスですら充分ではないだろう。金、銀すら権力によって管理されなければならなかった側面についてマルクスは著しく軽視しているからである。

それでも、マルクスが指摘したように、貨幣は世界市場でのみ充分に展開する。世界市場が貨幣を創出する。すなわち、世界市場的広がりのもとでのみ、貨幣はその本性を顕現するのである。

しかし、奇妙なことに、これまでの貨幣史は先進国の貨幣史しか扱ってこなかった。ドル史、ポンド史、円史。なぜか、周辺部（第三世界）の貨幣史は論議の対象になってこなかった。世界市場的関連での理解、貨幣をめぐる政治的葛藤の理解、この2つの柱を立てようとするかぎり、周辺部を不可欠の構成要素とする世界システム全体のもとで貨幣は扱われるべきだろう。全体とは言えぬまでも、せめて全体志向をもちたい、というのが本書の題名の由縁である。

経済学というわけのわからない難解な論理をもて遊ぶのではなく、くだけた、分かりやすい、種々のエピソードを含めた楽しい歴史を語りたいというのが私の年来の夢である。本書もそれを志したが、依然として夢の実現は難しい。御容赦願いたい。

ケインズ、マルクス理論から見た見解

没歴史的、機械論的合理主義に陥っている「経済学批判」

に展開する。世界市場が貨幣を創出する。すなわち、世界市場的広がりのもとでのみ、貨幣はその本性を顕現するのである。

しかし、奇妙なことに、これまでの貨幣史は先進国の貨幣史しか扱ってこなかった。ドル史、ポンド史、円史。なぜか、周辺部（第三世界）の貨幣史は論議の対象になってこなかった。世界市場的関連での理解、貨幣をめぐる政治的葛藤の理解、この2つの柱を立てようとするかぎり、周辺部を不可欠の構成要素とする世界システム全体のもとで貨幣は扱われるべきだろう。全体とは言えぬまでも、せめて全体志向をもちたい、というのが本書の題名の由縁である。

経済学というわけのわからない難解な論理をもて遊ぶのではなく、くだけた、分かりやすい、種々のエピソードを含めた楽しい歴史を語りたいというのが私の年来の夢である。本書もそれを志したが、依然として夢の実現は難しい。御容赦願いたい。

……

「大道廃（すた）れて仁義あり。知恵出でて大偽あり」（大道廃章）という老子の文がある。『太平記』はこれを「仁義は大道の廃たる処に出、学教は大偽の起る時に盛也」（巻第一）と訳したそのすぐ後に「かえって悲しむらくは、公のただ古人の糟粕をあまなべて、空しく一生を区々の中に誤まることを」とたたみかけている。確かに、学問は、ごまかしが行われる時に盛んになるようだ。互いが互いをごまかしだと言い募っている。これまでの学問の背骨であったものを打ち壊すことに興じる若い人たちを、ジャーナリズムがまた面白くもてはやす時代でもある。しかし、どうであろうか。「周辺のこと、自分勝手な拒絶をしめすけれど、世間の流れには何の疑問もいれず身をゆだね、お上のいいつけにも、素直に従う」（野坂昭如「タックル右往左往」『週刊文春』1986年3月27日号）新しい人たちの説で、私たちは救われるのだろうか。相対視の姿勢は大切だが、行き過ぎた相対視から生まれるであろうものを想像するとき、私などは血の凍る思いがする。本書は多くの誤解の渦中に巻き込まれるであろうが、あらかじめ、この弁明だけはしておきたい。

小野先生の影響か？

歴史というものを欠いた新傾向受容という姿勢への批判

本山美彦（1993年）『ノミスマ（貨幣）—社会制御の思想—』三嶺書房

あどけない乳児の笑顔は、どのような鬼の心をもなごます。赤ちゃんの汚れなき笑いを憎むものなどはない。しかし、あの天使の笑顔は、この世の苦しみをなにも知らないことよってのみ生み出されるものである。この世に対する知識をもつようになればなるほど天使の笑顔は消えて行く。幼児は、その母親が自分だけのものでなく、弟のものでもあり、父親のものでもあるという恐ろしい事実を知るとともに、その表情に最初の陰りを浮かべるようになる。兄弟間の葛藤、父親への憎悪が加わって、子供は、精神の激しい不安と動揺に次第にさらされるようになる。つまり、自分だけの世界から他者の存在を認知せざるをえない状況に追い込まれることよって、人は、長い分裂の時代を生き続ける。表情は険しくなり、あどけない乳児時代の笑顔は完全に影を潜めてしまう。笑顔が蘇るのは、存在するものすべてをやっと認容できるようになる老人になってからである。それは、乳児の笑顔と外見は似ているものの、無知からくる笑顔ではなく、人生のすべての関門を潜り抜け、あきらめの静寂に到達した達人のみが作り出せる笑顔である。人生のあらゆる苦しみがその笑顔を生み出したのである。

社会も人生のこのような発達過程と同じ経路をたどるのではないだろうか。眼前にある社会は、あまりにも苦しい。正義の名において、人が人を殺戮する。働けど働けど精神の安定は得られず、時間に追いまくられる。弱者はつねに心を引き裂かれる。差別と絶望が地球上の多くの部分を支配している。このような修羅場の社会ではあるが、かつては、人々が貧しくとも肩を寄せ合って幸せに暮らしていた時代があったのではないだろうか。社会科学はその想像上の社会を共同体と名づけてきた。そして、眼前の修羅場は、過去の共同体を将来に再現するためにあるのではないだろうか。いまの苦しみは、幸せな共同体を再度生み出す陣痛の苦しみではないのか。多くの社会学者はそのように夢想してきた。本書もその夢を共有するものである。

人は、日常の営みとできごとに完全に埋没しているわけではない。日常の営みの彼方には共有できる理想郷が存立できるのではないかと絶えず夢見ている。大阪人が「なにわ節」という言葉を多用するのは、商人（あきんど）としてのガメツサへの後ろめたさが心の奥に伏在しているからである。あまりにもドライに事に対処する日常性への歯止めとして、「なにわ節」が語られ、それがかなり上位の価値観として位置づけられているのである。「なにわ節」とは、大阪人の行動がそのものを体現しているから、語られる価値観ではなく、その逆である。このような屈折した心理は世界のあちこちに普通に見受けられるものである。」（～ ページ）

ヘーゲルの言葉

悟りの境地に達した老人の笑顔の意味

共同体 = コミュニティと読み替えた

ガメツサのアンチテーゼ「なにわ節」

本山「世界経済論」の方法論に重大な転換期をもたらした事件 = 阪神淡路大震災

「はしがき」の全文を読んでみよう。

本山美彦編（1995年）『開発論のフロンティア』同文館

戦後五〇年という区切りのよい一九九五年は、戦後の経済的廃墟を克服でき、未曾有の経済的繁栄を生みだした戦後のあらゆるシステムが、いたるところではころびを露呈していることを如実に示した一連の大事件から始まった。一月七日午前五時四六分に阪神・淡路島を襲った震度七の激震は、中央によって集中管理されている現代都市文明の信じがたいほどの脆さを人々に思い知らせた。

神戸長田地区、兵庫地区の大火災は、消火用水の送水が、激震による水道管破裂によりストップさせられたために、消防車の放水ができなかったことによる。何万人もの人々が、地震による家屋倒壊ではなく、全焼によって家財等のすべてをなくした。水道管破裂による漏水をも厭わずに送水を止めていなければ、あれほどの惨事は引き起こされなかったであろう。しかし、当局は漏水防止のために、機械的に送水を止めた。地震の惨事の大きさに気づかなかった当局のとっさの判断は、マニュアルどおりに行動することの選択だったのである。前例にないことを個人の決断ですることの難しさをそれは示している。それでもなお、人口稠密地域に地震を想定した防火用水が設置されていなかったことに多くの人々は信じられない思いを抱いた。

救助隊の来援は決定的に遅れた。道路という道路は避難する車で溢れ、身動きできない状態であったし、消防署への電話が通じなかった。電気も水道もガスも瞬時にして止まった。停電で多機能付きの電話は使用できなくなった。石油ファンヒーターも使えなかった。もちろん、風呂など沸かせる状態ではなかった。調理できないために、人々には食べるものがなかった。避難所に行こうにも、どこが正式の避難所なのか誰ひとり知らなかった。そもそもテレビが映らず、被災地の人々には情報らしい情報がなく、被災者は眼前の猛火から逃げることに必死になるほかなかった。人々はなんの誘導も受けず、近くの学校に逃げこんだ。寒い日であった。学校では防火のために火を焚くことはおろか、石油ストーブをつけることすら禁じられた。

避難所に当てられた体育館では、もともと、暖房が禁じられていたからである。これまでの禁令を無視して、風邪の蔓延を防ぐべきであるという意識はそこにはなかった。

学校の先生方は、生徒の世話どころか、避難者の世話に忙殺された。学校の先生だけではなく、たまたま避難所に居合わせた市の職員もまた緊急事態に対応しなければならなかった。市の職員は、避難者からの罵声を浴びるだけで、市や県からの指示はほとんどなかった。それまで機能していた指揮系統がずたずたに寸断され、マニュアルにはない緊急事態の連続に対処しなければならなかった。これまでの日本型社会システムの誇りであったコンセンサスの積上げという方式を実行しようにも、時間的余裕も、周囲に相談すべき同僚や上司もいなかった。情報の流れる組織の通路がなくなっていた。

災害が海外で大きく報道されると、世界各地から救援部隊が阪神地区に駆けつけようとしたが、受入れ側の責任者が誰であるか不明なために、日本への入国許可がなかなか降りず、降りても十分な活動場所は与えられなかった。全国から一五〇〇億円を超す義損金が寄せられた。しかし、どのような配分方法にするのかの決定ができなかった。とりあえず、全壊と半壊家屋に住民登録のある人には一律一〇万円を支給することになったが、全壊、半壊、一部損傷の判定を行なうべき被害調査がやっつけ仕事で、人々の憤激を買った。借家人には義損金が支給されるが、家主には支給の資格は与えられず、ここでもまたトラブルが続発した。震災後三ヵ月たっても、まだ第一回義損金の処理がすまず、巨額の義損金が宙に浮いたままであった。

社会システムのあちこちに隙間があいていたという事実を、被災者たちは悲しくも認識せざるをえなかった。カネはある。物資もある。ボランティアのおかげで人手もある。しかし、それらを相互に結びつける組織ががたがたになっていた。同じ神戸市でも、北区や西区では被害らしい被害はなかった。南部地区では積乱雲が発生するほどの大火の勢いが強まるばかりであるのに、震災のあったその日に、被害のなかった地区では平常どおりの生活が営まれ、カラオケ喫茶が営業しているという有様であった。被災地からほんの数キロしか離れていない非被災地では、同じ神戸市でありながら、人々や従来の組織が被災地への緊急物資の輸送や水の配給に懸命になっているという光景を眼にすることはなかった。

「多くの避難者が雑用をボランティアに任せてしまって、共同作業をほとんどしてくれない」と愚痴ついた、東京から駆けつけたあるボランティアの一人が、「頑張ろう、神戸！」と書かれた町角のステッカーの「頑張ろう」を消して、「働け、神戸！」と書いてしまったと私に語った。大きな略奪も暴動もなかった。くり返しそのことが誇らしく報道された。しかし、もっとも近くの被災を免れた地区が被災地区に救援の手を差し延べることもなければ、避難所での炊き出しもその多くが避難者の手によるものではなく、先生、ボランティア、自衛隊員に頼る度合いを日々強くしていた。それは、外国人による自主的な救援活動の組織化と非常に対照的な光景であった。日本の近代的都市における無報酬の奉仕と自治、この点の欠如を思い知らされた阪神・淡路島大震災であった。

道路、建物、交通機関も社会システムの重要な一角であるには違いないが、具体的なかたちであらわれない日常生活のこまごまとした約束ごとや、人々の行動の規律といったもののほうがより重要な部分を構成しているものである。突発的危機がなく、平和な社会のなかで、なるべくトラブルもなく、構成者全員の所得を増加させるという面では、戦後の日本の社会システムは非常に効率的に機能してきたと思われる。しかし、戦後五〇年の平和な歳月とともに、突発的な危機対応能力がほとんど喪失していたことを被災者は知ることになった。全国各地から応援部隊が駆けつけてくれた。被災者の一人としてこの点については万感の思いで感謝している。それでも、生活を再建する確かな方法は、生活の場を同じくするおじさん、おばさんたちによる相互支援であるとの思いもまた多くの被災者に共通の感情である。ボランティアの善意はありがたい。しかし、いかに善意であっても、がさつにも土足で生活の本拠に乗りこまれて、指図されたことへの住民の反発の大きさは否定できない。台所があるのだから、炊き出しなど自分ですべきだと、隣県の知事が言ったとか言わなかったとか問題になったが、水もガスも電気もなく、家屋が倒壊している惨状下でどうやって飯を炊くのか、商店という商店が休業を余儀なくされているのに、必要物資をどうやって調達しろというのか。普通の生活を営める高みから出た発言で、いとも簡単に被災者の自立云々というものほど嫌らしいものはない。みずから被災者の立場になって、恥ずかしいことだが、私はやっと途上国の人々の恨みを理解できるようになった。

阪神・淡路島地区には全国から膨大な義損金が寄せられた。しかし、当地には義損金を分配するノウハウがなかった。なまじ義損金が集まったためにいらざる混乱も生じた。先進国による途上国援助にも似たようなことがあるのだろう。公平な分配をめぐる紛争があり、そこには必ず利権が結びつくのであろう。義損金は見舞全なので返済しなくてよい。しかし、援助の多くは利子付きの返済義務をもつ。

震災の混乱下では、いわゆる市場メカニズムを作動させてしまえば大変なことになる。交通手段がほとんど麻痺している条件下で、物資を需給関係のみで流してしまえば、まず避難者は購入できない。べらぼうな価格のついた商品が、所得の高い層に独占されてしまうだろう。家屋の解体、撤去、再建は資金力のある大企業のみが可能になり、大企業の社員だけが衣食住と交通手段を会社から支給されることになるだろう。

阪神・淡路島大震災では、この市場メカニズムの作用を拒否するところからしか、社会生活の回復ができないことは、被災者なら誰でも皮膚感覚から理解できる文脈である。ところが、近年の開発経済論の文脈は、市場メカニズムを貫徹させることが近代化の大条件となり、世銀・IMF融資のことごとくが、融資条件に自由市場の創設を盛りこんでいる。今日の途上国の多くが、阪神・淡路島大震災以上の惨事を内戦、天候異常で依っている。これら地域で市場メカニズムを作動させてしまえば、富のすべては浪費されるか、一部特権階級によって海外に移転させられてしまうのは、当然であろう。そもそも、論理の矢印を反対につけてはならない。

ある意味、日本型社会システムの崩壊の始まり

コミュニティーの欠如。ある意味、日本的な伝統はすでに崩壊していた。

本山先生の息子さんのこと。避難者の自立性の欠如

Proudhon 『信用と流通の組織化と社会問題の解決』 1848年3月31日
「社会主義の教義は、現在の恐慌のもとでは人民を救うのに無力であることが証明された。ユートピアの適用には、準備を整えた主体、蓄積された資本、開かれた信用、確実な流通、繁栄の状態を必要とする。ユートピアは、われわれに欠けているものすべてを必要とする。しかしそれは、われわれに欠けているものを創造することはできないのである。
記述的で紋切り型の経済学は、現在の状況においては、社会主義と同じく不毛であることが証明された。需要と供給を原理のすべてとする学派は、だれもが必要をもち、だれも供給しようとしないうちは、万策つきざるをえなかった。
そして最後に、独裁やターゲタや一切の革命的策略は、お灸が死体にはきかないように、普遍的停滞にたいしては無力である。

日本は、あらゆる点で不満が残る社会だが、それでも、緊急事態のときには、市場メカニズムを作動させなかった点で先進国のひとつであると言えるだろう。しかも、先進国は、ルーティーン下でも、国際環境、政治、金融、等々の諸力を自国に有利に展開させて、市場メカニズムの生の作用を極力防いできた。むしろ、貧しく、危機的状況にある途上国ほど、自由な市場メカニズムの猛威に怯えているのである。

もともと、開発経済論は、市場メカニズム信仰を拒否するところから生まれたという出自をもっている。それは、ヨーロッパ統合の嘗為から生まれ、植民地経済の暴虐から離脱する希望をもつ人々の心をつらえてきたものである。ところが、これほど巨額の援助をしているのに、まったく効果が上がらないのは、途上国がだらしがないからだと、徹底的な自由化を要求するのが最近の開発経済論である。これでは、阪神・淡路島の被災者が激怒した某知事の発言とどこが違うのか。途上国経済がまったく駄目で、儲けの機会もないものならば、なぜにかくも多数の多国籍企業が現地で展開しているのか。当地のことを心から思ってくれる人で

なければ、混乱している当地には足を踏み入れないで下さいというのが阪神・淡路島の被災者の気持ちである。カネはたしかに欲しい。しかし、そのカネをもらうことで、自分たちの意見が通らなくなるとすれば、阪神・淡路島の被災者の多くがそのカネを拒否するであろう。必要なのは、具体的に自分の労力を提供してくれる人たちである。いわんや、当地で商売してがっばり儲けて帰る人たちには絶対してもらいたくない。開発経済論が意味をもつのはその点に集約される。

惨事を知らないで、いい加減なことは言わないでくれと、被災者の多くが抱いた気持ちは、現在の途上国の人々が、先進国出自の開発経済論者にたいして抱く反感と同じものである。本書は、開発経済論のそもそもの出発点がなにであり、どのように墮落してきたかの告発を怒りに満ちて提出したものである。

もう一度、ブルードン前掲書の次の言葉を思い出せ。「記述的で紋切り型の経済学は、現在の状況においては、社会主義と同じく不毛であることが証明された。需要と供給を原理のすべてとする学派は、だれもが需要をもち、だれも供給しようとしないうときには、万策つきざるをえなかった。」

援助ではなく、単なる災害・開発ビジネス、つまり単なる搾取ビジネスへの批判。

開発 = 搾取 = 地球との共存
関係概念

自立援助をしないツケ

本山「世界経済論」のエッセンス

矢野修一（2004年）『可能性の政治経済学—ハーシュマン研究序説—』（法政大学出版局）

現実の政治同様、近年、経済学の世界も保守化の傾向が著しい。経済学の主流において、マルクス経済学は、とうの昔に単なるイデオロギーとしての扱いを受けていたが、保守主義の台頭、冷戦の終結という事情は、マルクス経済学の没落を決定的なものにし、ついにはケインズの経済学をも葬り去った感が否めない。一部の人々が、それでもさまざまな理論を模索しているものの、いま、経済学の世界は、新自由主義に代表される保守的な思考によって支配されているといつてよい。

現在の日本で主流派経済学は、勇ましい「構造改革」の指南役を担っている。市場原理を徹底させ、非効率な銀行、企業、労働者を淘汰すれば、活力溢れるものたちがとって代わるだろう。市場メカニズムは神聖不可侵であり、社会の改良とか変革を意図して、その動きに介入するなどもつてのほかである。そのようなことは歴史が証明しているではないか。財政赤字の累積を見よ、社会主義体制の崩壊を見よ。市場経済という神を奉ずる以外、難局打開の道はないのだ。現在のそのような不況局面にあつて、主流派経済学の主張とは、さまざまなレトリックや理屈に飾られているとしても、煎じ詰めれば、こうしたものであろう。

保守化傾向を強める経済学の世界では、閉塞状況を克服するための社会の改良、変革など、口にするのも気恥ずかしくなるような状況である。そのようななか、本書ではあえて、変化を導く知性のあり方をアルバート・O・ハーシュマンに求め、彼のいう「ポシビリズム」(possibilism)を検討し、社会科学における「ポシビリズム」の意義と「可能性」を世に問うことにしたい。いまある状態がすべてではなく、現状は変えうるし、人は変わりうる。文明の危うさ、社会の壊れやすさを意識しつつ、真の変化を導く知性となりえていなければ、いかに精緻な理論化が進もうと、社会科学は空しいものとなる。筆者なりに読みとれば、数多くの著作に込められた彼のメッセージとは、こうしたものである。主著が邦訳されていることもあり、ハーシュマンは日本の学界でもさまざまな分野で注目され検討されてきた。屋上屋を架す愚を恐れず、本書では、単に個々人の上昇志向を理論的に正当化するというよりも、「希望の組織化」に向けた理論としての「政治経済学」こそ、ハーシュマンの目指したものであるということを明らかにしていきたい。(2ページ)

市場経済という「神」が登場する時代。

「可能性追求主義」のこと

本山美彦を通じたハーシュマン論

本山美彦の学問姿勢のエッセンス

ポシビリズムというスタンスは、社会科学、とりわけ正統的経済学に対して「変化」への視点を求め、法則、モデルではとらえきれない人間行動の「意図せざる結果」に驚愕し刮目すべきことを主張するものである。人間は将来を完全に予見できないがゆえに、誤り、失望するが、外界に働きかける行動をとおして、学びうる存在でもある。誤り、学びうる人間を前提すればこそ、変化を認識し、そのプロセスを導く知性を組織しうる。理想的市場、理想的国家において想定される合理的経済人、哲人は、完璧であるがゆえに、学びえないのである。(50ページ)

本山「世界経済論」を一言で表現したもの。本山美彦先生が著作や講義を通してわれわれに問いかけたかったのはこの言葉に要約されるのではあるまいか。

報告者はブルードンの次の言葉を基に「communismに陥った罌」（本山編（2005年）『「帝国」と破綻国家』ナカニシヤ出版）を執筆した。

「調和と友愛の口実のもとで、意見の分岐、利害の対立、情念の闘争、諸思想の敵対、勤労者の競争を社会のなかで破壊しようとするものである。まさに人は社会体から運動と生命を取り除こうとしているのである。そこに共産主義の致命的誤謬があり、臨時政府は、何かわからぬ影響によって、その好意的な代弁機関になった。

しかし、正義、統一、一致、調和、さらに友愛でさえも、かならず二つの項を前提としていること、絶対的同一、つまり絶対的無という不条理な体系に陥るのでなければ、矛盾は、社会のみならず宇宙の根本法則であることを理解するには、たいして考察の努力はいらない。

これが、私の宣言する第一の法則であり、それは宗教および哲学と一致する。それは、矛盾であり、普遍的敵対である。

しかし生命が矛盾を前提とするのと同じく、今度は、矛盾が正義を要求する。そこから創造物および人類の第二の法則、すなわち敵対的諸要素の相互浸透、相互性が生じる。

相互性は、創造物においては、存在の原理である。社会秩序においては、相互性は社会的現実の原理であり、正義の公式である。それは、思想、意見、情念、能力、気質、利害の永続的な敵対を基礎とする。それは愛そのものの条件である。

相互性は、「自分にしてほしいことを他人にたいしてなせ」という掟において表明される。経済学はこの掟を「生産物は生産物と交換される」という有名な公式に翻訳した。

ところでわれわれを貪り食う悪は、相互性が無視され、破壊されることから生じる。救済策のすべては、この法の公布のなかにある。われわれの相互関係の組織化、ここに社会科学のすべてがある。

（中略）

したがって今われわれが必要としているのは、労働の組織化ではない。労働の組織化は、個人的自由の本来の対象である。労働をうまく行なうものは、利益を得るだろう。この点では、国家は勤労者にたいしてこれ以上言うべきことをもたない。われわれに必要なこと、私が勤労者の名において要求することは、相互性すなわち交換における正義であり、信用の組織化である。」（337～338ページ）

阪上孝訳『信用と流通の組織化と社会問題の解決』

（河野健二編『資料フランス初期社会主義』平凡社）

しかし、明らかに本山「世界経済論」の影響を強く受けているといえる。

鈴木啓史「communismに陥った罌」（本山編（2005年）『「帝国」と破綻国家』ナカニシヤ出版）
「ブルードンは『貧困の哲学』において、マルクスが難じたようにヘーゲル哲学の誤用を認めた。しかし、それはアンチノミー（antinomy = 二律背反、自己矛盾）が総合・完結できるという点にであった。

『所有の理論』（一八六六年）では電池の二つの極が互いに破壊しないと様々に、アンチノミーは解消されないとされる。つまりアンチノミーは融合するのではなく、社会の発展にしたがって、絶えず不安定な、変化しやすい均衡を見つけることだというのである。これからの世界情勢、将来社会はブルードンのいうように「アンチノミーの均衡」あるいは「新しい矛盾の創設」という観点に立たねばならない。これが実現した暁にはブッシュ大統領のいうカッコ付きの「自由の前進」が本来の自由の前進となりうるのである。そして先にあげたキッシンジャーの言葉が再確認されることになるであろう」（303ページ）

「アメリカの「自由」と「民主主義」の伝道、伝道者は、この小説『沈黙』のような「ころびもの」の運命をたどらざるをえないだろう。自分たちが「普遍的な正義」と思っているもの、しかし、他国から見た場合、それは単にcommunism的な偏狭思想としか映っていなかった。それは各地域の実情や風土というものを全く無視した布教でしかなかった。しかし、後に気がつくことになる。それは、自分たちの「自由」や「民主主義」を各地域の実情や風土に合わせて折り合わせることである。それは本国の教えからすれば、矛盾であり、邪道かもしれない。されど、多元的な思想を相互浸透させる、新しい矛盾を創設すること、つまりアメリカが内部で理念的に持っている federation 思想（26）を覚醒させることこそが必要とされているのである」（306ページ）